島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第15号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
所在地：〒690-8504
島根県松江市西川津町 1060
島根大学法文学部 宮澤研究室
発行：2021年 11月 13日

【 研究小論 】

「草雲雀」(“Kusa-Hibari”)を読む

夏目 岳
(島根大学大学院修士課程1年)

夏が過ぎ去り、あつという間秋の気配が感じられる時節になった。網戸の向こうからひんやりとした夜気がそっと部屋に忍び寄ってくる。耳を澄ませればコオロギが鳴いている。こんな風に虫の鳴き声に聞き入ることができるのも松江の良い所だなあと思ったりする。秋の夜の静けさにしみじみと感じ入る。さて、ハーンもかつて同じように秋の虫の鳴き声に耳を澄ませていたようである。

ハーンは昆虫にまつわる様々な作品を残しているが、『骨董』(Kottō)にて「草雲雀」(“Kusa-Hibari”)という随想作品を記している。草雲雀とは小型のコオロギのことであるが、ハーンは本作品にて虫籠に飼っていた草雲雀に思いを馳せつつ情緒に富んだ思索に耽っている。ハーンは草雲雀の鳴く声について次のように語っている。

But he sings the song of his race as it was sung a myriad years ago, and as faultlessly as if he understood the exact significance of every note. Of course he did not learn the song. It is a song of organic memory,—deep, dim memory of other quintillions of lives, when the ghost of him shrilled at night from the dewy grasses of the hills.(237)

それでも、いく千年も昔からその恋の歌を、あたかも一節一節の意味をすっかりわかっているかのごとく、歌いつづけてきたのである。むろん、習い覚えたわけではない。

それは生得の記憶の歌と言ったらよかろう。その魂が丘の露に濡れた草かげから、夜ごと声をかざりに歌うとき、それは何億もの同族たちのはるかおぼろげな記憶の歌なのである。

興味深いのは、ハーンが草雲雀の歌声を「有機的記憶の歌」(a song of organic memory)と記している点である。ハーンはしばしば様々な随想作品において、「有機的記憶」(organic memory)や「遺伝的記憶」(hereditary memory)という言葉を用いて、記憶が世代を超えて受け継がれるという思想を表明している。本作品でもまた、ハーンは草雲雀の鳴く声にそのような太古から綿々と受け継がれる記憶を見出している。祖先の恋の経験をわずかながらも記憶しているが故に草雲雀は恋の歌を歌うというのである。

私は兼ねてより、このようなハーンの遺伝的記憶なるものに強い関心を抱いているのだが、この遺伝的記憶について、私はその科学的正しさというものに興味・関心があるのではない。むしろ、草雲雀の歌声にそのような受け継がれる記憶を見出すというようなハーンの態度に強い関心を抱く。それは、いわば現在という時の刹那において我々が知覚できる事物に過去を見出す態度とも言い換えることができるかもしれない。このように、ハーンを意識は常に事物の内包する見えざる世界、過去へと開かれているのである。

しかし、過去に開かれた存在であるのはハーンだけではないようだ。ハーンは続ける。“So that his longing is unconsciously retrospective: he cries to the dust of the past,—he calls to the silence and the gods for the return of time....”(237)(この虫は、知らず知らずのうちに過去に想いを馳せているのだ。過去の塵に向かって切なく鳴いているのだ。静寂と神とに呼びかけ、時間を呼び戻そうとしている……。)

つまり、ハーンのそばで歌を歌うこの草雲雀と同様に、実際のところ、無意識下においては、ハ

ーンのみならず誰もが皆、現在にありながらも過去に開かれた存在ではないだろうかという考えに思い至るのである。

記憶を軸とした深淵なハーンの思索に触れた時、世界の見方が一変する。日常でしばしば目にする小さな草花や生き物に出会った時でさえ、私は宇宙の誕生や死といった壮大なスケールを有した悠久な時の流れに想いを馳せることができる。過去は現在に内包されて生き続けているからである。ハーンの記憶を巡る思想には興味が尽きない。

※本稿で用いた日本語訳は全て池田雅之訳による。

引用文献

ラフカディオ・ハーン『新編 日本の怪談Ⅱ』池田雅之編訳(KADOKAWA,2019)

Hearn, Lafcadio. *Kottō: Being Japanese Curios, with Sundry Cobwebs*. New York: The Macmillan Company; London: Macmillan & Co., ltd,1902.

【 読書会に参加して 】

基礎研究としての ラフカディオ・ハーン ～吾が痛恨の人生談として

角森 惇周 (あつし)

学生時代、私は残念ながら、島根大学でない大学の英文学科に所属しておりましたが、どうもしっくりしないものがあり、基礎研究を目指して哲学に転じ、またそこで今度は、キリスト教神学などにも触れました。そして今度は、社会学へ。比叡山で修行を許していただいたり、寺で坐禅を組ませて頂いたり、神社めぐりや、古事記や俳句趣味も学生時代からでした。70年代後半、当時の公害問題やら科学の危機にフッサールやら、そしてまた実証主義と観念論の間を彷徨い、実存哲学には疑問を持ちながら解決の手段もないままで、アメリカへも二度遊び、インド、スリランカにも、19才の時から夢で行ってみました。もっとも、いずれもほんのかすっただけ、かじっただけのこ

とです。シェークスピアなどもやれたとは思いますが、何かが違う。ネオ・プラトニズムに関心を持ったり、そしてスペンサーの“*Faerie Queene*”を学ぼうにも当時は手段なく。哲学科へはもともとシェリング研究の目的でした。しかし、また外れて、結局、常に基礎へ、基礎への自己運動でした。しかし、それでもって基礎が得られたかということ、全く基礎が得られないのでした。「超激務」の教員時代に、常松先生はじめ数名でのアメリカ文学談話会というのに参加させてもいただいておりますが、ドイツ哲学に基礎を置いては、とても常松先生や高橋先生のお持ちの深いご理解には至ることはできませんでした。学生時代に「(英語)基礎研究」、「英語史」「英語史特講」などを習ったのが渡部昇一先生でしたが、先生は同時に「現代文明論」という講座をもって居られました。残念ながら基礎研究を哲学に求めた私は、哲学科に出入りしだし、「現代文明論」は出席していません。ただ今思うに、何故、渡部先生が言語学なり、英文学が深く理解できたのか、また文明論講座が持てたか、また何故、一時期の日本の売れっ子評論家になり得たかですが、それは「基礎研究」が出来ていたからだ、今になって思うのです。(基礎演習は渡部先生の演習が一番印象に残っていますし、教科書も大切にしてみました。言語と人間がテーマで、進化論と人類学上から見た言語論でした。)

渡部昇一先生の「*アングロサクソンと日本人*」(新潮選書)(昭和62年)に次のようなことが書かれています。

「・・・『理想』という雑誌は、毎月私のところに送られてくるので、現代イギリスの哲学はどうなっているのだろうかと興味があって読んでみた。すると最初から終わりまでヒュームの名前が出てこない。「おかしいなあ」と思った。私が数年前にイギリスにいた時点では、どこへ行っても哲学が話題となるとヒュームばかりという感じだった。今回、その名前も出てこないのはおかしいなあと思ったわけである。たまたま東大の哲学教授をしておられる井上忠さんとタクシーで一緒になったことがあったので、『理想』の現代イギリス哲学を語っている座談会で、ヒュームの名が全然出てこないが、あれはおかしいんじゃないか、と訊いてみた。すると、それはおかしくない、と井上さんは言われた。井上さんによると、ヒュームの名前を出してしまうと座談会をする意味がなくなるという。要するにヒュームというのは、イギリス哲学界ではお釈迦さまの掌みたいなもので、現代イギリス哲学を語るの上で遊んでいるとも言えるのであって、ヒュームを出してしまうと、それはもう現代哲学もへったくれもな

くて、要するにヒュームだけになってしまう、と説明して下さった。それでなるほどと納得したわけである。イギリスの哲学を語る座談会でヒュームを出すと、おのずとヒュームだけになる恐れから、結局現代イギリス哲学を語るという場合には、彼ほど偉くない人たちの哲学はどうなってるか、という話に集中することらしい・・・そのくらいヒュームは偉い哲学者である。そのヒュームの人間悟性論を読んだカントが、独断の眠りから起こされ、それがカント哲学の出発点となったことは、これまた有名な話である。つまり、カントに考えることを始めさせた人である。」(p. 135~)

それで、私は基礎研究とは何かをはたと知ったわけです。基礎研究は語られざることを語るに近い。いわば常識を疑い、そこに問いを見いだし、そこを語ることであると。もしかして下手をしたら、タブーな同語反復となるのを敢えて研究するのが基礎研究なのでしょう。つまりは、ヒュームは英国での基礎研究の対象でありましょうし、そして基礎研究としてのヒュームの本場は英国なのです。

前置きが長くなり恐縮ですが、私は基礎研究を求め、結局は哲学・神学・社会学まで辿りつき、放浪しましたが、つまりは「ラフカディオ・ハーン」こそ日本の異文化理解—文学・哲学・社会学・民俗学・人類学等—の基礎研究の対象であり、方法であったのです。うかつでした。つまり、ハーンは日本の人文・社会学においては、英国哲学におけるヒュームのごときなのです。私が英文学から哲学へ、哲学から神学へ、神学から社会学へ、いつも上っ面だけを舐めながら、探していた真の基礎研究とは何と、自分の足元にいた出雲の小泉八雲だったのです。「青い鳥」でした。渡部先生が英語・英文学の今では少し評判が悪いが、「知的」大家となり得たのは、ひとつには、先生がラフカディオ・ハーンを深く知っておられたからだと言って、当たっていたとしても、外れてはいないでしょう。私は英文学科でも哲学科でも、社会学科でも、日本人の先生からも、外国人の先生からも、三学科の同級生からも、在学中、少なくとも「学問的」にラフカディオ・ハーンの名を直接に聞いた記憶は一度もありません。カトリック系の大学のせいもあったでしょう。出雲人だから死角になってしまったでしょう。もちろん、NHKドラマで小泉八雲を、この30年間に二たび放映されているのを見てはいました。しかし、私の耳に直接に入ったのは、数十年前、教員に初めてなった頃、後に八雲会の会長になられた日野雅之先生からでしたが、「何で八雲会に誘ってくれないのかなあ」といつも思っていました。ハーンを本格的に読みだしたのは近年からです。渡部先生に

「自分の弟子になれ」と言われていましたが、その前にお亡くなりになってしまいました。

袋小路に迷い込んだ私には、J. S. ミルとハーンは、私の命の恩人です。J. S. ミルも学会では、ヒューム的な扱いかと思えます。おそらく経済学部でも。ハーンは基礎研究の対象です。出雲地方は「ハーンの基礎研究」にはもってこいの場です。ハーンも、出雲の神話も島根県の歴史・自然環境を抜きには語れません。人文・社会科学自体が、行方を疑われているからこそ、しっかりした基礎に基づいた研究が大切となる事も確かでしょう。島根大学は恵まれています。我が痛恨の人生でした。(私の娘は、幸い島根大学総合理工学部で学ばせていただきました。また総合理工学部と法文学部との歴史的な深い関係に感謝いたしております。)

【特別寄稿】

ささやかだけれど、
かけがえのないもの

宮澤 文雄 (島根大学法文学部)

本年はいつになく全国各地で災害が発生した一年でした。とくに水害や土砂災害が多発し、山陰地方や静岡県熱海市伊豆山には甚大な被害をもたらしました。ここ松江市の加賀では大規模火災もありました。そしてコロナ禍が、被災された方々の状況をより複雑にさせ、被災地の復旧を困難にさせたことは言うまでもありません。それらは、「あったこと」ではなく、いまでも続いています。

このたび思いもよらない災難に遭われた方々に対し、本会会員一同、衷心よりお見舞い申し上げます。そして、亡くなられた方々に対し、ご冥福をお祈りし、ご遺族の皆様にお悔やみを申し上げます。

本会は会員数が30名にも満たない小さな研究会です。このコロナ禍により、会員の参加が制限されたり、開催会場が封鎖されたりと、活動を一

時中断していた時期もございますが、それでもあきらめず続けてゆこうという気持ちひとつで継続して参りました。もちろん、コロナが終息してから再開することも選択できましたが、そうしなかつたのは、この会がわたしたちにとってかけがえのない場所だからです。この居場所を失うことでもたらされること、その損失の大きさを多くの会員が理解していたからです。

折しも、オンラインで劇作家の平田オリザさんの講演を聴く機会を得ました。そのとき、印象的だったのは、「命が一番大事なのはみんな同じだけれど、二番目にくるものはみんなちがう」という言葉でした。この言葉の意味するところは、人にはそれぞれに大事なことがある、だから、それぞれに守っていかねなければならない、ということでしょう。あるいは、大事なことはそれぞれにちがっていても、大事に思う気持ちは同じである、とも考えられます。こうして本会が16年目を迎えられたのは、会員一人ひとりがこの会をかけがえのないものと思ってくれているからです。

また、わたしたちのほかにも同じ思いをもっておられる方々がいらっしゃいます。ハーンを愛読し、文学を支えに生きている方々です。わたしたちのささやかな活動は、自己完結しているのではなく、そうした方々と共同しておこなっている活動だと考えています。東京、富山、広島、熊本をはじめ全国から送られてくる会報やお葉書を読みながら、わたしたちは文学活動という未完のプロジェクトと一緒に携わっているんだと窮地に立たされてはじめて思い至りました。

月に一度の読書会、年一回の研修会、年二回のニューズレターの発行、本会の活動は実に小さく目立たないものです。それでもこの文学の灯はともし続けたいと思います。かき消されてしまいそうなほどか細い声ですが、それでも本紙を読んでくださる方々に向けて、文学の扉をいつも開けていたいと思います。命を守り抜き、安全と平安を確保したあと、次に求めるものとして、文学に手を伸ばしてくれる方が必ずいらっしゃるからです。わたしたちの人生をかけがえのないものにしてくれるのは、命の次にくる二番目、三番目のものだからです。

【 読書会の記録 】

事務局長 横山 純子

コロナのために昨年3月から休んでいた読書会を、昨年11月に再開し、これまで続けてこられたことを皆様に感謝致しております。8月には松江市立図書館の定期講座に、会で参加しました。「小泉八雲と記憶について」の本会副会長・長岡先生の講座は、興味深かったです。先の見えない不安な時勢ではありますが、少しずつ少しずつ私たちの会もまた歩み始めています。

第137回例会

2021年6月12日(土) 13:00~15:00
島根大学法文棟1階135教室 参加13名
“The Dream of a Summer Day” 12.16-17.16

第138回例会

2021年7月10日(土) 13:30~15:30
島根大学法文棟1階135教室 参加12名
“The Dream of a Summer Day” 17.18-21.23

第139回例会

2021年8月21日(土) 13:30~15:30
松江市総合文化センター 大会議室
松江市立図書館定期講座「小泉八雲に学び・親しむ」長岡真吾氏「小泉八雲と記憶について」
参加15名

第140回例会

2021年9月11日(土) 13:30~15:00
島根大学法文棟1階135教室 参加12名(内 zoom 参加1名) “The Dream of a Summer Day” 22.1-27.17

第141回例会

2021年10月9日(土) 13:30~15:30
島根大学法文棟1階135教室 参加11名(内 zoom 参加1名) “Gothic Horror” 213.1-218.4

編集後記：ご投稿いただいた皆様には、お忙しい中ご協力を賜りこころから感謝申し上げます。今回は、島大・院生の方のご投稿もあり、うれしい限りです。大歓迎です
(高橋栄)